

な組織が結成された。運動が起こってから約30年経った現在では、歴史的町並みを保存・活用したまちづくりが各地で行われ、その制度や手法は内容も様々である。このように着実に保存活動が拡大しつつある一方、消え行く歴史的環境があることも事実である。それらの多くは過疎化、高齢化、衰退等の問題を抱えている全国に無数に存在する町並みである。この様な未だ保存整備の成されていない歴史的町並みの一例として、また、住民から活動が始まったという将来性を保持した地域として茨城県真壁町市街地を取り上げた。真壁の発展と住民生活の保障を内包する歴史的町並みの保存・再生を実現する手法を、地域に密着した調査で探る。

真壁の町並みの現状として、歴史的建造物が市街地内に点在しており、保存地区指定の難しい状態にある。また、その老朽化が芽立ち、聞き取り調査から住民の防災面に影響を与えていることが明らかになった。歴史的建造物所有者側としては、多くが居住部分を改築し、設備等もある程度整備されていることから、住みにくさをあまり感じていない。それよりも、蔵の維持に関する負担が感じられた。行政の対応として、「ディスカバーまかべ」へ毎年補助が出ているが、具体的施策はない。住民の意識を知る上で行ったアンケート調査

からは、半数以上の人々が伝統継承や活性化のために町並み保存に前向きであるが、反対に50歳代を中心に働き盛りの人々は危惧を見せている傾向がある。

今後の真壁における町並み保存活動の進め方としては、住民の多くが活性化を望み、住民団体が積極的姿勢を見せていることから、伝統的建造物群保存地区制度を目指す前に、住民と商店街が協力して条例や制度にとらわれない、商業活性化につながる独自の基準を定め、行政はそれを背後から支える柔軟な補助や事業を実施する形態が適合すると思われる。そして、町並みの保存・再生を実現する上で、重要であると考えられる具体的要点として、①より多くの住民への意識作り、②商店街や他団体との連携、③ネットワーク作り、④伝統的個性の再認識と再活用、⑤経年適追跡調査、⑥行政の協力、⑦資金の調達、の7つを挙げる。

歴史的町並み保存はそれ自体が目的ではなく、地域に活力をもたらし、より良い生活を築くまちづくりのための手段でもある。つまり継続が鉄則である。真壁は、ディスカバーまかべの発足を町並み保存の原点とすると、その歴史は4年間に過ぎない。今後の活動と特色ある保存計画の創出に期待したい。

弓道組織の地域展開

—戦後の東京地区を中心に—

松本史子

本論文では、弓道の組織がどのように形成され、地域展開していったかを時代に沿って見ていく。

まず、流派が生まれてから分布するまでの「江戸時代以前」、初めて武徳会という全国的な組織ができた「戦前期」、全日本弓道連盟によって全国統一がなされた「戦後」の三つに時代を分け、それぞれにおいて、組織あるいは組織的な役割を果たしたものを通して、弓道界の形成を調べることにした。

江戸時代以前では、室町時代頃から流派が発生し、江戸時代には、藩校を通しての流派の分布が見られる。戦前期は資料が少なく、わからないこ

とが多いが、大日本武徳界を中心に射法統一、審査による段位・称号の授与が試みられた。戦後は全日本弓道連盟により射法統一が成し遂げられ、各地区連盟を核に弓道普及がはかられた。しかし、後の二つの時代を通して、学生弓道だけは独自の道を歩み続けているのである。

その後、「東京」という地区について同様に調べ、現在では弓道組織が地区レベルでどのように活動しているか、そしてそれによってどのような地域展開が見られるのかを人口統計や弓道場の分布などの資料を用いて考察した。

東京地区の東部は、江戸時代すでに弓道が盛ん

であり、弓道場もあったので、後の第一、第二地区の発展の基盤ができていた。しかし、西部は地域自体がまだ形成途中だったため、昭和45(1970)年頃までは第三地区はその面積が広いにもかかわらず、他の二地区と変わらない規模だった。しかしその後の地域人口の増加や婦人教室の開催により弓道人口が増え、今では、他の二地区の二倍に達している。

人口のデータを見てみると、平成5年で頂点に達し、その後減少し続けていることがわかる。こ

れが現在の連盟の抱えている問題で、なんとか増加傾向にもっていかうと対策が練られている。現段階でもっとも効果的と考えられているのが、学生が社会に出るときの弓道離れを食い止めることである。そのためには、今のように学生弓道と一般弓道が分断されてはならない。連盟が学生弓道を完全に吸収することによって、本当の意味で弓道界の全国統一が達成されるのであり、弓道人口の減少にも歯止めをかけることができるのである。

鉄道、道路、大規模小売店の進出等による商店街への影響

三原直子

私にとって商店街の最大の魅力は、その町ごとの雰囲気を感じられるところだからである。駅から近く同じような位置にある二つの商店街があり、一方は人通りも多く栄えているのに対し、もう一方は人通りも少なく寂しい感じである。この現状の原因となったものをつきとめ、商店街の可能性を考えたいというのが本論文の研究目的である。

商店街の定義は、平井をはじめ数多くの方が定義している。また商店街の最近の研究として田中が「商店街を1つの企業としてとらえ、総合的に問題解決をはかろうとする試みは、時代の変化の中で大きな曲がり角を向かえたのである。そこには、競争の激化によって、自立的な個別点を中心に派生的な商店街像を追求する必要性がますます高くなっている。」と指摘している。

商業環境は戦後の物不足に時代から高度経済成長期につくれば売れる時代に移り変わり、さらにオイルショックあたりを境にも余りの時代に入ってしまった。現代は商品・機能に企業格差がなく何らかの付加価値をつけないと売れない時代になっている。

商店街の一般的現状は、「停滞・衰退している」商店街が全体の94.7%にのぼり一般的に厳しい状況にある。

笹塚地域は関東大震災後急速に発展し、それま

で農村の町だったのが一転して住宅地に変わった。東京大空襲で大きな被害を受け二つの商店街も受けたが復興は早く昭和30年前半に商店会を足発、昭和40年代はじめに復興組合となっている。経済の発展とともに商店街も発展するが昭和40年代後半からの笹塚地区へのスーパーの進出は、二商店街に大きな影響を与えた。アンケート調査によると、一番大きな影響を受けたものはショッピングセンター21及び伊勢丹ストアの進出であった。観音通り商店街は位置的にショッピングセンター21の目の前であり、客足の影響は非常に大きかった。また、笹塚駅高架化工事に伴う出口の変化は、観音通り商店街により大きな打撃を与えている。十号通り商店街に関していえば、スーパーの進出により閑古鳥の鳴く有り様となったこの商店街では、若者、つとめ人を呼び戻すなど積極的な活動を行うことで商店街自体の力を増大させ、理事会・青年会の幅広い活動のもと今の活気ある商店街を保っているという。

大規模小売店の進出の影響の多大さと、駅の構造の変化に伴う人の流れの変化、そして商店街の問題への取り組みの違いがこの二つの商店街の人通りの違いへとつながったと考えられる。これからの商店街の取り組みでどう商店街が変化していくかこれからみていきたい。